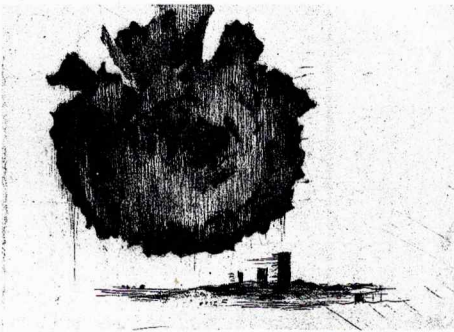


朝日 歌壇 俳壇



〈ランタンキュラスと街なみ〉 岩尾恵都子

馬場あき子さん退任を惜しむ声

朝日歌壇の選者を47年間務めてきた馬場あき子さんが3月末で退任することが決まり、続々と反響が寄せられています。退任を惜しむ投稿歌の一部は、さっそく本日の歌壇面にも掲載されました。

「97歳までお元気な選者をされていたことに敬意と感謝を申し上げます」「選歌、選評で、馬場さんの反戦の志に何度も励まされてきた」といった声や、投稿した歌が馬場さんに採り上げられた思い出をつづるものも多数ありました。東京

都の上田結香さんは、2014年に入選した歌へ帰ったままに喧嘩ばかりするの、でしうけれど仲良く見た旅の景色」に對する「喧嘩も楽しい」という選評にやさしさがあふれていて、胸が熱くなりました」と振り返ります。

2月25日付の記事で触れた「より良い歌を詠むために必要なのは『言葉を礎石にかけること』」という発言に対しては、「この一文を心に刻み精進していきたい」という決意も寄せられています。

退任を記念して4月19日に朝日新聞東京本社で開く記者サロン「馬場あき子さん振り返る 朝日歌壇の半世紀」では、心に残る投稿歌や作者について伺うほか、募集する短歌(希望者のみ、自由詠)から馬場さんが数首選んで講評します。短歌の締め切りは3月20日。申込時のアンケートの中で受け付けています。

会場の定員は100人。4月25日からオンラインでも視聴可能(定員なし)。紙面購読者は無料で申し込みます。申し込みは募集ページ(https://t.asahi.co.jp/wvov) またはQRコードから。

田島健一著「平成の一句」 1月1日の「元旦やまつさらの空騒ひたる」(桂信子)から12月31日の「除夜の鐘僧の反り身を月光に」(山田弘子)まで、1日につき1句、1年分の365句を紹介。(ふらんす堂・1980円)

第42回児太現代俳句新人賞 現代俳句協会主催。千葉市の百瀬一鬼さん(27)の「火の聲」(50句)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300。短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(選評は3月25日付の朝日新聞に掲載)。

片言の増えゆくほどに木々芽吹く (長野市) 縣 展子
海苔粗朶の海へ天使の梯子かな (淡路市) 稲谷 有記
蠶やモンゴロイドの地から地へ (本庄市) 篠原 伸允
大根煮る神代色の電甲煮 (広島市) 金田 美羽
春の雲高しと見れば鳥引けり (山梨県市川三郷町) 笠井 彰
清書して文改むる春とも (東京都足立区) 望月 清彦
驚涙はせねど贅肉あたか (栃木県壬生町) あらゐひとし
恋猫がお澄まし顔を見せに來ぬ (相模原市) 荒井 篤
春の朝黄身の流れるハムエッグ (東松山市) 鈴木 圭
てのひらにひよこのやうな春がきた (日立市) 加藤 宙

【評】縣さん。孫など、身近に幼い子供がいるのだろう。片言と芽吹きのアナロジーの説得力。稲谷さん。雲間からさす放射状の光。その詩的な呼称が早春の暗色の海と美しい対比をなす。篠原さん。調べ勇壮。広大な領域に広がる彼らと我ら。

前を行く君はまぼろし梅月夜 (三島市) 市畑 晶子
冗談もリハビリの内のどけしや (鹿児島市) 前田 粧谷
春一番一番だらうがシャツは飛ぶ (東京都練馬区) 早川 厚
三・一一蓬を摘んでゐたあの子 (神戸市) 岸田 健
冬と云ふ無口な奴と三月月 (横浜市) 三餘 正孝
春先の店先にある板書魚 (千葉市) 宮城 治
予報士のマフラー真似て出勤す (志木市) 手塚 雅子
つば九郎名乗りに演じ雪は罪々 (岐阜県揖斐川町) 野原 武
生きたいと妻の無念や春の月 (岡山市) 沖 直保
☆返返る我々でなく我で居る (新潟市) 八木 昂人

【評】一句目、梅の花と月光の美しい夜は、現実と幻との境目が曖昧になってゆくようだ。二句目、冗談を言い合える環境のあることが大切。三句目、春二番まで詠う句は珍しい。四句目、地震や津波に消えた年若い命のことを我々は忘れない。

臆夜の言葉とならぬものばかり (堺港市) 大谷 和三
会釈されはたと我あり春の暮 (東京都足立区) 望月 清彦
一本の梅に南ふ峰の茶屋 (香川県琴平町) 三宅久美子
春愁や又も現る独裁者 (福島県瑞穂町) 安部みさ子
発想に始まる俳句春の水 (八王子市) 額田 浩文
☆返返る我々でなく我で居る (新潟市) 八木 昂人
白杖と大を遺して春は近く (川越市) 益子さとし
ともかくも夫婦のままに日向ぼこ (札幌市) 岡崎 実
やじろへえ左三寒みき四温 (成田市) かとうゆみ
紅梅の我が世の春と爆発す (日南市) 宮田 隆雄

【評】一席。臆げにうごめく言葉以前のもの。逆に人間が言葉にしているものの方が少ない。二席。夕闇に溶けこんでいたのだ。はたと我に返る。三席。峠の一本の梅。広重の絵のような。十句目。自然の無心の爆発。なかなかこうはゆかない。

花の種時くや反戦歌のごとく (川口市) 青柳 悠
一幅の梅の掛軸つぼみのまゝ (茨城県阿見町) 鬼形のふゆき
受験生老人へ席譲りけり (川越市) 小澤 弘一
水温む岐路と気付かず岐路にをり (仙台市) 柿坂 伸子
落椿との道行くも海に出る (神奈川県寒川町) 石原美枝子
母の息継いで我が息紙風船 (松山市) しのはらまさし
雛飾る小さき家のちさき棚 (静岡県河津町) 岩城 紀子
人のみが己の名をもつ鴨の陣 (春日部市) 池田 桐人
和菓子屋へ梅咲く道を選びけり (市川市) をがはまなぶ
春風の伴走を得てアスリート (大和郡山形市) 岩城 進江

【評】第1句。「反戦歌のごとく」が力強い。「反戦歌」は戦争に抗議し反対する歌。第2句。掛軸に描かれた梅の蕾。当前のことを言っただけだが心惹かれる。俳諧味あり。第3句。優しい受験生。この「受験生」きっと試験に合格するでしょう。

風信